

● 制作者フォーラムのあゆみ ●

きっかけは贈呈式

制作者フォーラムは、全国5つの地区（北日本／北信越／愛知・岐阜・三重／中四国／九州・沖縄）で民放、NHK、制作プロダクション等、組織の枠を越えた制作者同士の自由な意見交換、交流の場を設けることを目的にした催しである。

そもそもは、第13回放送文化基金賞贈呈式（1987年）に合わせて、記念公開フォーラム「今、私がテレビで問いかけるもの」と題して始まり、以後同一のテーマで1993年まで7回開催された。これは、かねてから放送の現場で活躍する方が多数集まる贈呈式に、有意義な意見交換の場を作ることができないかという思いが実現したことによる。1996年からは福岡市で最初の地域フォーラムが「九州放送映像祭」との共催で開催された。



放送文化基金賞記念公開フォーラム（1987年）

局の垣根を越えて

制作者フォーラムの開催にあたり、企画から準備、そして実行まで、すべてを開催県の民放全局・NHKで組織する「世話人会」とその地域内の全放送局で構成される「実行委員会」が担っている。そうしたご理解・ご尽力のもと、開催地域は徐々に拡大し、2023年現在、34道県・約130局が参加するまでに成長を続けている。

さらに、他地域との交流の場として2004年より東京で開催されているのが、「全国制作者フォーラム」（放送文化基金主催）である。各地区の受賞者が東京に一同に会するこのフォーラムは、まさに放送局や地域を越え、番組作りの技術や経験、悩みなどを共有する貴重な催しとなっている。





活発な意見交換の場

制作者フォーラムの主な開催内容として、ミニ番組コンテストやトークセッションがある。

ミニ番組コンテストとは、ワイド番組中の1コーナーなどの短尺番組を会場で審査員や参加者全員が視聴し、優れた番組を表彰するものである。その場では、番組制作時の意図や取材対象者との距離のつめ方などを制作者が語る。審査員は、その番組の主旨を尊重しつつ、意見や感想を述べる。ときに音楽やナレーションを入れるタイミング、テロップの出し方やそのフォントにまで言及し、番組をよりよくするための惜しみないアドバイスを送る。

トークセッションは、第一線で活躍する“先輩”制作者たちが番組作りやこれからの放送業界について熱く語り合うもので、参加者との質疑応答も活発に行われ



ている。これまで制作した番組の裏話、企画を通すためのアイデアなど、ときにぶっちゃけトークに会場が笑いに包まれることもある。

フォーラム終了後には懇親会も開催されている。講評を受けているときの張り詰めた空気から一転、制作者同士がざくばらんに熱く議論を交わす光景や、審査員により具体的な質問をする場面が随所に見られる。フォーラムをきっかけに、新たな横のつながりが生まれ、近況を報告し合うほどの仲にまで発展することもあるそう。

交流の輪を全国に

制作者フォーラムは確かな年輪を重ね、かつて番組を出品・受賞した制作者が、その後、世話人会代表や審査員として参加する機会も増えてきた。「かつて自信を持って出品した番組に審査員から厳しいコメントをもらい、自分を見つめ直すきっかけになった」と語ったある制作者がいた。約10年後審査員として参加した際、「そのコメント一つひとつの重要性をより噛みしめながら丁寧に講評した」と振り返った。

参加者の中には、自分が所属する地区でフォーラムが開催されていないことを残念がる声もあった。そうした声にできるだけ応えられるよう、今後、まだフォーラムが開催されていない地域を取り込み、さらに交流の輪を広げていきたい。



● 開催年表

開催年度	九州放送映像祭 & 制作者フォーラム	北日本制作者フォーラム (旧:みちのく映像祭)	中四国制作者フォーラム	北信越制作者フォーラム	愛知・岐阜・三重制作者フォーラム	全国制作者フォーラム (旧:制作者フォーラム、若手制作者全国交流セミナー)	主なことから
1987	－	－	－	－	－	千代田区	放送文化基金賞贈呈式に合わせて、「今、私がテレビで問いかけるもの」をテーマに開催。 (以後、同一テーマで1993年まで7回開催)
1994	－	－	－	－	－	千代田区	設立20周年記念フォーラムとして、「テレビー来るべき知性のために」をテーマに開催。
1995	－	－	－	－	－	－	大阪で制作者フォーラムを開催予定だったが、阪神・淡路大震災が発生。急遽「シンポジウム～阪神大震災の検証『ライフライン情報と放送の役割』」を開催した。
1996	福岡市	－	－	－	－	－	九州・沖縄地区で「九州放送映像祭」と初共催。
1997	－	盛岡市	－	－	－	－	東北地区で初開催。
1998	－	盛岡市	岡山市	－	－	－	中四国地区で初開催。
1999	熊本市	盛岡市	広島市	－	－	－	
2000	福岡市	山形市	松山市	富山市	－	－	北信越地区で初開催。中四国、北信越地区はこの年から隔年開催。「みちのく映像祭」に北海道が加わり、「北日本制作者フォーラム」に改称。
2001	福岡市	－	－	－	－	－	
2002	福岡市	青森市	山口市	長野市	－	－	
2003	福岡市	福島市	－	－	－	－	
2004	福岡市	札幌市	高知市	福井市	－	千代田区	30周年記念事業として、4地区で受賞した制作者を東京に招き、「制作者フォーラムinとうきょう」として初開催。
2005	那覇市	仙台市	－	－	－	－	
2006	福岡市	盛岡市	松江市	金沢市	－	千代田区	「制作者フォーラム」を「若手制作者全国交流セミナー」に改称。
2007	熊本市	秋田市	－	－	－	－	
2008	福岡市	山形市	高松市	－	－	千代田区	
2009	福岡市	青森市	－	－	－	－	
2010	鹿児島市	郡山市	徳島市	新潟市	－	新宿区	「若手制作者全国交流セミナー」を「全国制作者フォーラム」に改称。
2011	福岡市	札幌市	－	－	－	－	
2012	福岡市	仙台市	広島市	富山市	－	－	
2013	福岡市	盛岡市	－	－	－	－	
2014	福岡市	秋田市	松山市	長野市	－	千代田区	
2015	福岡市	山形市	－	－	－	－	
2016	福岡市	青森市	山口市	福井市	－	千代田区	
2017	福岡市	福島市	－	－	名古屋市	千代田区	愛知・岐阜・三重地区で初開催。
2018	福岡市	札幌市	高知市	金沢市	名古屋市	千代田区	5地区で受賞した制作者を東京に招いて初開催。
2019	福岡市	仙台市	－	－	名古屋市	千代田区	
2020	※	盛岡市	※	※	※	※	新型コロナウイルス感染拡大のため、Web会議システムを取り入れて初開催。
2021	※	※	－	－	名古屋市	※	
2022	福岡市	秋田市	岡山市	新潟市	名古屋市	千代田区	北信越制作者フォーラムに山梨の全放送局、静岡の一部の放送局がオブザーバーとして初参加。
2023	福岡市	山形市	－	－	名古屋市	千代田区	

※新型コロナウイルス感染拡大による中止・延期

過去の開催内容はホームページをご覧ください。



越境的な出会いを、これからも

丹羽 美之

東京大学大学院 教授

全国制作者フォーラムにコーディネーターとして初めて参加したのは30代前半の頃だった。当時はまだ「若手制作者全国交流セミナー」と呼ばれていた。それ以来、心がけてきたのは、NHKや民放、地域や系列、報道や制作、あらゆる枠や壁を越えて、自由闊達に議論できる場を作ること。駆け出しの学者だった私もここに参加することで常に励ましと勇気をもらってきた。

制作者フォーラムが当初から力を入れてきた名物企画のひとつに、若手制作者を中心としたミニ番組の合評会がある。ミニ番組とは、夕方ワイド等の中で放送される短いレポートや特集企画などを指す。参加者がミニ番組を持ち寄り、率直に質問や感想をぶつけ合う。「なぜこのテーマを選んだのか?」「このシーンはどう撮ったのか?」。会場では、真剣な眼差しで、熱心にメモをとる制作者の姿が目立つ。

たかがミニ番組と侮るなかれ。誰もが数分のミニ番組を作ることから放送の仕事をはじめ、制作のイロハを学ぶ。地方政治の監視、社会問題の提示、人々の暮らしへの密着…。そこには番組制作のエッセンスが凝縮されているだけでなく、放送ジャーナリズムのいまが鮮やかに映し出される。そこでの取材が、より本格的な番組へとつながることも少なくない。ミニ番組は制作者の原点であり、その成長を促す孵化器でもあるのだ。

このフォーラムへの参加を機に、活躍の場を広げていく制作者を数多く見てきた。回を重ねるなかで、かつての参加者が後に立派な講師役となって戻ってくることも珍しくない。放送を取り巻く環境が大きく変わるなか、様々な枠や壁を越えて制作者同士がつながる必要性はこれまで以上に高まっている。ともに切磋琢磨できる仲間がいることで、人は勇気づけられる。制作者フォーラムはこれからも越境的な出会いの場であり続けてほしい。

これからの人たちに願うこと

阿武野 勝彦

東海テレビ放送 ゼネラルプロデューサー

眼を閉じて、考える…。「テレビの未来は…。一生懸命に番組を創ってさえいればいい時代は、遙か遠い…。

テレビはコミュニケーション、とどのつまりは出会いの場だ。新鮮な情報、そして人との出会い…。制作者は取材という出会いを繰り返して、番組表現に昇華させる。その先に、より良き社会がある…。もし、その志を失くしたら、テレビはただのお金儲けの装置でしかなくなる。

「制作者フォーラム」に、度々呼んでもらった。伝えたいことを次世代に伝えるまたとない機会なので、嬉しがつて行った。その集まりの中、不快な雑音が年々歳々大きくなると感じたことがある。制作費を極端に絞られたり、果ては番組を創ること自体をイラナイコトと言われるような職場環境だ。

モノを作る、モノを売る…。作るより尊い行為はないと私は信じてきた。しかし、ドン詰まりの資本主義は、売る方に優位な社会構造を導き出した。テレビでも、「信じられるのは数字」「番組より手っ取り早い金儲け」…病は制作者の心まで侵していく。「お金で買えないものがある」それを伝えるべきメディアの、笑えないジョークだ。

「制作者フォーラム」では、若手が地元の話、地域の問題をミニ番組にして発表する。切れ味鋭い取材とキラリと光る映像がある。作品は、出会いの大事な入り口だ。所属団体の垣根などは越えて語り合える場なので、質問攻めにあう年もあった。感想、アドバイスをと、自作を送ってくれる人もいた。そこには、テレビが置き去りにしてきた職人たちの熱が残っている。この熱を大事に熾し、より大きな炎にしていける以外に、テレビの生きる道はない。フォーラムのおかげで、たくさんの若手制作者に出会った。その出会いの後、翼を広げ大きく飛躍していく姿も、数多く見守ることができた。

テレビは、人と人をつなぐ装置だ。制作者は、たくさんの出会いを糧に、自分の人生とともにテレビの未来を切り拓いてほしい、心から願っている。

こだわり、 伝えるって面白い！

直川 貴博

福島中央テレビ アナウンサー

若葉マークが取れて間もない2019年に制作者として、その翌年に司会者として制作者フォーラムに参加させて頂きました。特集を作るやり甲斐を憶えたばかりだった当時の私は、あの場所で映像制作を“生業”にする意義を学びました。ワンカットに、テロップの出し方1つに、こだわる。伝えたいという“熱意”が、ディレクターの“こだわり”と形を変えて随所に散りばめられた先輩方の作品を前に「すげええわ。」と感服したのを思い出します。

とりあえずマネっから始めた私は“こだわる”難しさに直面するも…ディレクターとして“小さなこだわり”を詰め込み送り出した「NNNDキュメント」で、あの日大きく見えた背中に少しは近づけたのかな？と、ちょっぴりいい気になっています。

現在はアナウンス業務の比重が高くなりましたが、アナウンサーも番組のいち制作者に変わりありません。こだわり、伝えるに先には何があるのか。諸先輩方がいる高みを目指し、きょうも奮闘しています。



2020年全国制作者フォーラム
inとうきょう 司会

2019年北日本制作者フォーラム
in 仙台 出品

制作者フォーラムと 若手ディレクター

藤井 春来

北日本放送 ディレクター

ディレクターとして2年目。初めて制作者フォーラムに参加したのは、2022年に開催された北信越制作者フォーラムでした。目の前の業務や仕事に追われる中で、垣根を越えて様々な立場の人が放送の未来を語り合い、今まさに花が咲く番組の数々を観て、制作者とその場で話ができるという大変貴重な機会でした。

中でもテレビの主戦場に立つパネラーの方々による討論会での言葉は、現在、私が番組と向き合う姿勢の根幹となっています。映像だけではなく、多くのコンテンツが横並びになっている今、どうすればテレビが多くの人に観ていただけるのか。目の前の「あの人」へ届ける、強い熱量を持つ映像を作ること、一番観たい映像しか観てもらえないということ、撮影や編集で迷ったときはこの言葉を胸に日々取り組んでいます。

そして、フォーラムで多くの映像に触れることで、幼少期に自分がテレビの前で、様々な映像に心を動かされ業界に憧れたことを思い出しました。今は放送を届ける立場になったからこそ、初心を忘れず熱量をもって観る人の心を動かす映像を作っていきます。放送の未来に、少しでも役立てるよう日々精進していきます。



2022年北信越制作者フォーラム
in にいがた 最優秀賞

新たな道しるべとなった 制作者フォーラム

中村 奈桜子

NHK松山放送局 ディレクター

オノマトペを利用した映像作品を出し、中四国制作者フォーラムに参加させていただきました。フォーラムで最も価値を感じたのは、局を超えて交流できる時間があつたことです。各局から力作がそろい、さらにその制作者たちに取材の裏側の話を聞くことができたのは、今思うと贅沢な時間でした。様々な作品の制作過程を学ぶだけでなく、互いに「どうしたらさらに魅力的に制作できるか」といった議論も交わすことができ、表現の引き出しが増えました。

さらに、会場で繰り広げられた審査員の皆さんの話は、テレビ人生を歩みゆく今どう生きていくか考えるきっかけになりました。皆さんからいただいたご助言のように、ローカル局で働く今の日々を全身で味わいながら、テレビの型を破っていく発想を大事にしていきます。

まだまだ目の前の仕事に追われる日々ですが、忙しさにかまけて自分を見失いそうなときにはフォーラムで過ごした時間を思い出そうと思います。



右：共同で制作した別所寅之助氏（NHK高松）
2022年中四国制作者フォーラムinおかやま 最優秀賞

つくる楽しみ、 創造を持ち寄って

両角 竜太郎

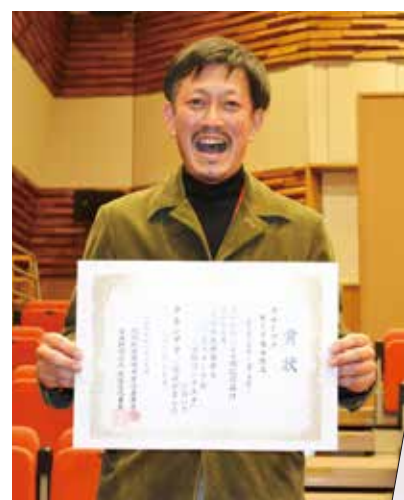
RKB毎日放送 カメラマン

局やエリアの垣根を越え、同じ志を持った仲間が集まり、それぞれの作品を語り合う制作者フォーラム。これまで私はカメラマンという立場で、自身が企画・撮影・編集した作品を手に参加させていただきましたが、集まった数々の作品に秘められた企画の裏話や撮影技術、そして試行錯誤から生まれた新たな視点や発想に驚かされることの連続で、多くの刺激を受けてきました。毎年楽しみにしている大切な学びの場です。

皆さんの豊かな引き出しとクリエイティブを盗み持ち帰っては「さあ、つくるぞ!」と制作の原動力にしています。

今後も新しいものづくりのために、この場から創造のたねを吸収し、自分なりの答えが出るまで考え続ける勇気を積み重ねていこうと思っています。

そして、映像祭で得たものをヒントにし発信していくことで、仲間たちとともに九州の映像文化を繋いでいきたいです。



2022年九州放送映像祭&
制作者フォーラムinふくおか グランプリ

